

大平さんの憶い出

池田 満枝

大平さんが、信濃町の私どもの宅へ最初にお見えになったのは、昭和十九年の春ごろだったと思います。

当時池田は東京財務局長で、その下に吉田晴二さんが総務部長、北島武雄さんが直税部長で、大平さんは間税部長だったと記憶しております。戦争も終りに近く、何せ料理屋の類がほとんどない時代でしたので、池田はよく役所の幹部の方を宅へお連れして、小宴会をしておりました。私がせめてものお酒の給仕をしようと思いますと、大平さんは、「奥さん、本当いつたら僕はアルコールが駄目なんです」と、つらそうな顔をしておっしゃいました。酒の頂けない方が酒の係の部長さんとは皮肉なものだなあと思い、ご体格からしても大変に召上がる方だと思いましたが、というのが、まず初対面の時の驚きでございました。

それから五年後、池田は大蔵大臣になり、大平さんには、黒金さんが仙台国税局長へ転出されたあとの秘書官をお願いしたのでございますが、発令の時大平さんは九州に出張中で、「ご恩顧を深謝するも、心千々に乱れて決心つかず、帰京まで猶予をお願いします」という電報が届き、池田は、「大平って面白い奴だ、こんな電報をよくしたよ」と、苦笑したことがございました。ところで、池田の秘書官は黒金さん、宮沢さん、大平さん、稲田さんとおられました。大平さんの場合は、宅にはさっぱりお出でにならず、池田が「お前から、朝は必ずくるよ、うにいえよ」と、申したこともあります。ある日、久々に顔を出された大平さんが、いきなり茶の間と廊下の境の鴨居にぶら下がって、真面目な表情で、「僕もいよいよ不惑の年になりましたよ。不惑になったら感ってはい

けないと思いますが、いよいよ惑うことになるんじゃないですかなあ」とおっしゃいました。

池田が、肩入れをした広島知事選挙が負けいくさとなった時には、大平さんは、「政治家って、つくづくいやですな。いつそ実業家に転身して、じゃんじゃん金もうけをしてみたい。そしたら、うんと献金して上げますよ」といつて大笑いしたことがあります。大平さんは、この後間もなく衆議院に出馬されました。池田の師匠の吉田総理が、わざわざ香川まで出向かれたのはよいのですが、池田があれほど念を押していたのに、吉田総理が盛んに「おおだいら君」を連発されたのは、大平さんの二回目の選挙のことだったのではないのでしょうか。池田内閣では大平さんは官房長官に就任なさいましたが、私どもの広島選挙区の人々、特に婦人連中は「記者会見の時の大平さんの、あの笑い顔がかわいらしい」というので、大変な評判でございました。

私のことに限っていえば、池田が総理として最初の渡米の時に、「外国語はしゃべれなくてもよいからぜひ従って行きなさい」と熱心に勧めて下さったのは、他ならぬ大平さんでございます。岸総理の奥様がお体が弱くて出かけられなかったし、私も家で留守番をしていればよいと思っておりましたのを、大平さんの強引さに負けて泣き泣き渡米に同伴をしたわけでございますが、それ以来、総理外遊の際は夫人同伴という前例が開かれまして、さすがに大平さんは創意工夫に富んだ先見の明のある政治家だったと、あとで感心した次第でございます。

大平さんは一見こつい風貌でしたが、あれで心根はやさしく、よく気のつくお方であったと思います。池田が東大病院で大手術をした直後のことでしたが、大平さんが熨斗袋をたくさん持ってお出でになりました。「先生方には、このようにそれぞれお礼をすべきなのですよ」と、大層なご配慮をして頂いたことは、十五年後の今日でも決して忘れることのできぬ憶い出でございます。本当に、大平さんの憶い出は尽きることがございませんが、今はただ「みたま安かれ」とお祈りするのみでございます。

(池田勇人元総理大臣夫人)